

たえてひさしくなりぬれど

第7期 OG 菊盛 真衣

いつもの時間にけたたましくアラームが鳴り、まだ眠った頭を強制的に起こして、私たちはいつも通り会社や学校に向かいます。いつもと同じ朝が訪れ、変わり映えのない毎が続きます。いや、続いているように見えます。“祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり”と、かの有名な冒頭で述べられるように、この世のあらゆる物事は絶えず移り変わっていくもので、自分や自分の身の回りには大小様々な「変化」が常に起こっています。アラサーになって肌荒れが治りにくくなったとか、お酒を飲み過ぎるとすぐに記憶が飛ぶようになったとか、結婚適齢期と言わんばかりに周りが結婚しまくるようになったとかいう類の変化から、2年間見守ってきたゼミ生がいなくなってまた新しいゼミ生が入ってくるとか、人の入れ替わりに伴ってゼミの雰囲気ガラリと変わる、とかいう類の変化まで。そうした次々と起こる変化の一つひとつに過敏になって、今や変化に「食傷」するという、奇妙な状態に私は陥っています。

そんな私が「変わらない」ものに惹きつけられるのは当然の成り行きかと思います。では、「変わらない」ものとはどういうものか、まずは同期の上田修平という男を例に取りましょう。ゼミを卒業して3年、彼が山口に赴任してから会うことは減多になかったけれど、先日東京に転勤が決まり、年末最後のゼミにふらりと来てくれました（酔っ払っていたけれど）。ふらりと来たわりに、現役ゼミ生の名前をホームページで予習して暗記してくるという徹底ぶり。さらに、今年度の三田論執筆時には、彼の卒論と同じ概念モデルを援用して同じ分析技法を使ったチームからの相談に、卒論のデータを紐解いてわざわざ山口から対応するという面倒見の良さを見せました。修ちゃんは、ぱっと見ノリが軽くて頭がおかしい人のように思われがちですが、当時 Web 担当でもないのに誰よりもゼミホームページを熟知するほどゼミを大切に思っていたし、ゼミの活動にも真摯に向き合っていました。少なくとも私にはそう見えましたし、同期の皆も同意す



(上) 2010年7月 スリーショット Before 版
小野先生を囲む上田君と著者（左端）

(下) 2013年12月 スリーショット After 版
3年経って少しは大人になった！？（著者は左端）





(上) 2013 年 12 月 オープンゼミで講演する氏田君

(下) 講演会を終えた氏田君と著者(手前は先生の御子息の史晃君)



とあります。酔っ払うと滅茶苦茶だけど、それすらチャームポイントに思えるほど、人情に厚くゼミにアツい、そんな彼の昔も今も変わらない姿に、私は心を震わせずにはいられませんでした。ゼミを卒業して3年も経てば、ゼミへの気持ちが多少なりとも色褪せていくはずです。それでも、ゼミと向き合う彼の姿勢は揺らがないし、ブレたりしない。ああ、変わらないっていいな、って素直に思いました。変わることで、変わらないでいることの方が、きっと、ずっと難しいと思うからです。

少し修ちゃんを持ち上げ過ぎた感じはありますが、彼の持つ「変わらない」ものが、どうやって生まれてきたのかを、今度は7期生全体を例にとって考えてみたいと思います。と言いつつ、話は逸れますが、年末日吉で行われたオープンゼミに同期ゼミ長兼今年度もOB会幹事の氏田が来てくれました。(ちなみに、修ちゃんや氏田だけではなく多くの7期生がゼミの教室や三田にふらりとよく来てくれます。) その日の打上げで、小野先生、氏田、8期ゼミ長の荻野くん、10期ゼミ長の石井くん、11期現役ゼミ長の内藤くんと私で卓を囲んだ時のことです。「ここにいるゼミ長の中で、もう一度ゼミをやるとしたら誰とやりたいですか？」と私が先生に単刀直入に尋ねると、先生は「氏田くん！」と即答しました。その中では彼が1番年長だったので肩を持っていたのだと思いますが、その理由を聞くと、先生は、「(私の方をご覧になりながら) こんなじゃじゃ馬を手なずけられ



オープンゼミ打上げにて。7期・8期・10期・11期ゼミ長および史晃君・史泰君と。

るのは氏田くんぐらいしかいない！」と仰るわけです。なるほど確かに、と物凄い勢いで納得したのは私と氏田だけだったのでしょうか。私を御すのに相当苦労しただろうと彼には同情しますが、私からすれば最初から手なずけられていたようにも思えます。彼自身にというより、彼の掲げた理想に手なずけられていました。彼はゼミ長になった当初から、「俺は小野ゼミを『最強のゼミ』にしたい」と言っていました。勉強に限らず何事においても最強でありたいと。顔だけじゃなくて言うことまで暑苦しい、それが氏田宗利という男です。そんな彼の熱い理想に、私を含め周りも燃えたのです。

最強のゼミではないけれど、最強の組織と聞いて、アメリカ海兵隊（U.S. Navy ではなく Marine Corps の方）を思い浮かべる私は普通ではないでしょう。アメリカ海兵隊を最強の組織たらしめる所以は色々あるかと思いますが、その 1 つに新兵訓練のための地獄のようなブートキャンプが挙げられます。ゼミでの 3 年次の活動もこれに似た所があります。ケースの質疑応答やディベートとなれば銃撃戦のような攻め合い、本番や本ゼミでやる方が絶対楽と言わせるほど追い詰められる同期の前でのプレゼン練習、今や日程にきつすぎてできない幻の第 3 回オープンゼミの実施等々、「最強のゼミ」を作るためのプログラムが 7 期生にも実行されました。海兵隊と同様、小野ゼミ流のブートキャンプを通じて、私たちは「なぜ」それをするのかを考えずして感じ、その根底にある理想を体現しようと努めていたと思います。海兵隊の標語に、
セムパーファイ
“Semper Fi!”という言葉があります。これは、「常に忠誠を」という意味なのですが、私たちも激しく切磋琢磨するうちに、自分のいる場所や自分を育ててくれる人たち、すなわちゼミという組織に対する常なる忠誠を抱くようになっていたのかもしれませんが。OB 会誌を書いてほしいと頼めば、快諾してすぐ書してくれる多くの同期生の行動に、そうした忠誠の一端をいまだに垣間見ることができます。忠誠なんて少々



負けず嫌いだらけの 7 期生の卒業写真

強い言葉かもしれませんが、皆さんお馴染みのロイヤルティのことで、簡単には変わらない強い気持ちのことです。変わりゆく物事の中で、私は、自分や同期の中に根付く、ゼミや互いに対する強い気持ちに、不変や安定を見出したということです。

さて、そんな親愛なる同期からよく「キクモリは今何やってるの？」と聞かれます。気づけば自分に起きた変化をきちんと報告していませんでした。この場を借りて報告させていただきますが、私は昨年修士課程を卒業し、今年度からは晴れて博士課程に進学しました。将来の夢は、学者です。あのじゃじゃ馬が学者になるというのだからこの世は謎だらけですね。ここで、「学者たるもの〇〇



修士学位授与式にて 大学院の同期生と

でなければならない」という規範めいたものを自分に課すとするならば、自分が身を置く学問世界に対して常なる忠誠を尽くさねばならないといったところでしょうか。その規範は、新知識の絶えざる創造と探究、そして、その教授と後進の育成という営みによって遵守され、その営みには弛まぬ自己研鑽を積む覚悟が必要であると考えています。守り続けるのが一見困難そうな規範ではありますが、私には幸いにも自分の背中を支えてくれる同期生や大学院の仲間がいます。私を見る彼らの目が、その目こそが、私を磨きまた強くするのです。



AMA（米国マーケティング協会）にて あのコトラー先生と

最後に、今回のタイトルですが、もはや勝手にシリーズ化してまたも百人一首から引用しています。“滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ”という歌で、滝が枯れその落ちる音が聞こえなくなってから長い年月が経ったけれど、見事な滝だったという名声は今も人々の間で語り継がれているよという意

味です。何事も変化は避けられませんが、百人一首が千年の時間を超えて残ったように変わらないものもあります。ゼミを去って長い時間が経っても、同期生の根底にある強い思いが今も変わらない様子に覚える安心と、学者となる自分が、遠い将来学界を退いた後も変わらず語り継がれるような功績を修められるように研鑽を積もうという決意を、この和歌に託してみました。卒業エッセイでもないのに同期生への敬意をこうも長々と綴る OG も珍しいですが、これをもって私の近況報告に代えさせてください。